

身体にまつわるジェンダー幻想

飯田貴子（帝塚山学院大学）

はじめに

本発表では、まず体力と言われる身体能力に注目する。「男と女は身体が違うのだから、体力にも男女差がある」「男は体力がある」「女は体力がない」、「だから・・・」という性別特性論を擁護する「体力のジェンダー差」言説を覆す試みをする。

次に、身体文化としてのスポーツが、いかにジェンダーの差異化を構築し、性別二元制を支持する強力な装置として機能してきたかについて述べ、最後に、現在の子どもの体力に潜むジェンダー幻想について考えてみる。

体力観の形成

体力とは活動および生存の基礎となる身体能力である。前者は、行動体力と言われ競技力を反映し、後者は防衛体力と言われ健康の基盤となる。

高校生・大学生874名を対象にした調査によると、1) 健康・体力に関する有能感では、男女ともに健康の方が高く、健康に対する自信は女性が、体力に関する自信は男性が高い。「体力があること」と「健康であること」は必ずしも連動していない。2) 「体力」から連想されるのは、男女とも「スタミナ、持久力」、「パワー、筋力」が圧倒的に多く、これらは「競技力」を代表するものである。人生に必要な体力については、男女とも「病気になる、健康」をあげる者が多い。3) 「女は体力がない」と感じるのは男性よりも女性に多く、スポーツや運動をしているときに良く感じている。しかし、日常生活においては男女とも多くの者が「あまり感じない」と回答している。4) 体力テストにおける持久走の距離の差（女子 1000m、男子 1500m）等は、体力に関する女性の劣位を印象づけている。

以上から、一般的な「体力観」は「競技力」をさしており、この「競技力」は「人生に必要な体力」であると考えられていない。また、日常生活では男女の体力差を感じる者は少なく、「体力があること」が必ずしも「健康であること」に繋がっておらず、「体力観の形成」に体力テストが影響を及ぼしていることが明らかになった。

体力テストのジェンダーバイアス

現在実施されている文部科学省「新体力テスト」

は、平成 11 年度より内容が改められている。主な趣旨は、測定対象が「競技力に関連する体力」から「健康に関連する体力」へ移行したことである。このパラダイムチェンジについては評価したいが、「競技力」の内奥に男性中心主義が潜んでいることに全く気付いていない。ここでは、東京オリンピックの前年（1963）に正しいスポーツの発展と国民体力の向上を目的に標準化され実施された、文部省「スポーツテスト」のジェンダーバイアスを暴く。

1) スポーツテスト成立に直接影響を及ぼした国内外の体力テストを歴史的に考察すると、筋力優位の時代に端を発し、戦時に再燃する国民の体力問題を背景に、国防力と生産力の増強を目的に実施された、国家による国民＝兵士・労働者＝男性の体力管理の歴史と置き換えることができる。

2) スポーツテストで測定される体力要素は、行動体力のエネルギー的体力だけであって「強さ」を感じさせる。この体力は筋重量に左右されるため、性による差が大きく現れる体力である。スポーツテストで測定していない、サイバネティクスの体力は「巧みさ」を感じさせ、この体力に関与する脳・神経系の機能は性差がない。同様に、測定していない防衛体力は、平均寿命の長さに代表されるように、飢餓や寒さや諸々のストレスに対する抵抗力など、女性が男性より優れた一面をもつ体力である。

3) 測定種目の妥当性をジェンダー視点から検討すると、体力差を無視した種目（反復横とび、垂直とび）、過去の運動経験が大きく影響する種目（ボール投げ、ジグザグドリブル）、明らかに女性の劣位を示す、同一でない種目（1500mと 1000m持久走および急歩、懸垂腕屈伸と斜懸垂腕屈伸）がみられる。

以上から、文部省「スポーツテスト」は、社会生活の基盤となる体力の評価が十分できていないだけでなく、エネルギー体力を過大に評価させ、筋重量の優劣に基づく体力の男女差を認識させる過ちを犯している。

関係論的分析の重要性

アン・ホールはスポーツのジェンダー研究における関係論的分析「スポーツというものが、社会内の

権力集団の利益と必要に役立つように歴史的に生み出され、社会的に構築され、文化的に規定されているという仮定から出発する」の重要性を指摘する。この分析手法は、まさに体力テストにもあてはまる。

そして、オリンピックやワールドカップに代表されるスポーツは、フェアプレイ（参加の公平性）の精神のもと男女別に行われ、メディアのキラコンテンツとなる。男性スポーツの代表とされるサッカーやレスリングは、オリンピックでは女子の公式参加が遅れ、同一賞金となったテニスのグランドスラムでさえも、男子5セット、女子3セットマッチで行われる。一方、新体操やシンクロナイズドスイミングは、オリンピックに男子種目はない。

スポーツはこうして、性の二項対立に「一流と二流」「男らしさと女らしさ」を内包して発展してきた。このスポーツ文化は体育教材としても浸透している。

スポーツにおける性別の曖昧性

真の女性だけが出場できる権利を保護するため、1966年に視認、次いで性器診察による性別確認検査が導入された。その後、検査は性染色体質検査に移行した。しかし、性染色体だけでは性別を完全に判定できないこと、性染色体はXY型であり男性と判別されても、アンドロゲン（男性ホルモン）に反応するレセプター（受容体）が欠如している者は、パフォーマンスにおいて有利にならないという事実がわかってきた。

次に浮上してきたのは、トランスジェンダーの選手の扱いである。とくにMtFの選手に問題があるとして、IOC（国際オリンピック委員会）は早々に性再適合手術後の選手に対し一定の条件下での五輪出場を承認する決定をし、2004年アテネ大会より適用した。性の越境は承認されても、性別二元制は堅持されているのである。

その後、2009年世界陸上競技選手権大会においてセメイヤ選手の性別疑惑問題が起こる。IOCおよびIAAF（国際陸上連盟）は改めて性別確認検査についての検討を迫られ、2011年に新規定を発表した。新規定の趣旨は、パフォーマンスの男女差は主にアンドロゲン値によるとして、高アンドロゲン症の女性選手の出場資格を規定し、今後も男女別に競技を分けて行うということである。性別二元制の限界については医学問題として取扱い、新規定に適合しない女性選手は女子競技に参加できないことになり、長く続いた性別確認検査は廃止された。

以上は、スポーツにおける性別に関する規程であり、IOCやIAAFはこれらと一般社会でのジェンダーとは別物という立場をとっている。

なお最新の研究結果によると、エリートアスリート693名の大会出場直後の内分泌データから、男性選手の16.5%が男性のテストステロン（アンドロゲンの一部）一般値の下限より低く、女性選手の13.7%が女性の一般値の上限を越えているとし、IOCやIAAFの規程は理論的に筋が通らず、長続きしないと報告している。

ちなみに、筆者らの体育スポーツ系男女学生3243名を対象にした調査において、身体の性別において男女のカテゴリーに当てはまらない者は0.6%、トランスジェンダー等は2.8%、ホモ並びにバイセクシュアル等は7.8%であった。

文科省「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」にみるジェンダー幻想

文部科学省は平成20年度より、「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」を実施している。これによると、体育の授業や通学を除く1週間の総運動時間60分未満のほとんど運動しない子どもが、小学5年生では男子10.5%、女子24.2%、中学2年生では男子9.3%、女子31.1%となっている（平成22年度）。総運動時間に歴然とした男女差が認められ、よく運動する子どもとしない子どもの体力差が大きいことも指摘されている。

そもそも、小5児童の体力・運動能力における男女差とはどのようなものか。同年度の男女の平均値を見ると、50m走では9.38秒、9.65秒、立ち幅跳びでは153.45cm、145.28cm、ソフトボール投げでは25.23m、14.55mである。走跳投の記録は身長が高いほうが有利である。そこで、身長を比較すると、男子138.78cm、女子140.17cmで女子が男子を上回っている。体格を考慮すれば、女子の体力・運動能力がもっと優れていても良い筈なのに問題視され難いのは、「女子の体力は男子より低くて当たり前」と言うジェンダー幻想によるものではないだろうか。性別による評価基準とその値も問題視されなければならない。

終わりに

体力テストやスポーツは、もともと体格や筋力やパワーに優れている人が好成績を得るように仕組まれた文化であることが明らかになった。であるから、男女の能力を最大値や平均値で比較すると男性が優れているが、Voglerは男性の98%は女性の最高レベルより低く、性別間の差よりも同性間の個人差の方が大きいという。となれば、身体にまつわる性差は、歴史的社会的文化的に構築されたものだと言えるかもしれない。

なお、紙幅の関係上、文献は当日資料に掲載する。